三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2007,　第27号, 97 − 104頁

英語教育コースの大学生による児童への英語活動

荒　尾　浩　子

小学校における英語科の必修化は今や教育界で最も注目を集める話題の一つとなっている。その収まりを見ない議論の背景には、社会の要請としての日本人の英語力向上への高まる期待と同時に、日本の小・中学生の学力低下など、学校教育全体を見直す必要性、また言語を問わず子供たちのコミュニケーション能力の低下がある。教育現場の教員らも世間の議論、自らが日々直面している生徒たちの現状によって、英語必修化には各々の見解があるであろう。そのような中、全国で英語活動をなんらかの形で行っている学校は17年度の調査で93.6%であることが判明している。実態に差はあれ、英語活動として英語の導入が受け入れられていることは明確のようだ。必修化の議論はさておいても、教員養成課程で将来教員を目指す学生としては、小学校での英語活動の経験、知識は重要であると思われる。本稿では、17年度にフレンドシップ事業として、三重大学英語教育コースの2年生が北立誠小学校3年生を三重大学に招いて英語活動を行った際の実践報告をする。実施内容、児童の感想、学生の反省から、学生が小学生に英語に親しむ経験をさせる意義や双方が学び合う貴重な機会であったことを再確認することができた。

キーワード：フレンドシップ事業、英語活動、地域連携

はじめに

平成16年度から、英語教育コースの『総合演習』においてフレンドシップ事業を実施している。英語教育コースに在籍する学生として、地域貢献の一つとして、何かできるかと考えて最初に思い当たったのが、小学生を対象とした英語活動である。英語教育コースの学生が行うフレンドシップの目的としては、①自分達の専門を通しての地域貢献②地域の児童と親交を深め子供との接し方などを学ぶ③活動内容を計画、準備する過程で活動の組み立て方、実施方法などを学ぶ、といったことが挙げられる。目標は設定されたが、初年度である平成16年度は、まさに手探り状態であり、担当教員、学生とも全く形の見えない未知のもの挑戦するような不安感があった。平成17年度は、2回目ということで、昨年度の先輩達の活動記録が大変、役立ち明確なビジョンを持って計画、準備、実施を行うことができた。また事業を実施する2年生は、当年度から、英語科教育特講Ⅰの授業の実地研究を通して、事前に北立誠小学校3年生の英語活動にゲストとして参加しており少なからフレンドシップの対象となる子供達と顔見知りになり、彼らの英語力、日頃の英語活動の様子等を把握できていたことも、事業をスムーズとした要因となった。

前年度の子供達の感想や先生のご意見、また事業実施中のその様子から、大学生による英語活動は非常に、歓迎されていることが充分に見てとれた。平成17年度の児童に関しては、前述の実地研究以外に、北立誠小学校の『町たんけん』の取り組みの中で、前期に開講の現代英語演習Ⅳ（荒尾浩子担当）を数分間参観し、事業を実施する学生らが大学で、英語を学習する姿を教室内で見ていた。その時、学生達は簡単に英語で自己紹介をし、The very hungry caterpillarを児童達に読んであげるという一幕もあった。これらの体験から、児童は、学生達に『英語が上手なお兄さんとお姉さん』という羨望の瞳と親近感を持っていた。児童達は、日々の英語活動ですっかり英語に自信をもっており（自分たちは英語が話せる）と思っている者も多いという。この授業参観以降、後期の実地研究での学生の英語活動への参加、フレンドシップ事業を控えているということもあり、児童達は学生との接触に期待を膨らませていたそうである。日々の英語活動ではALTや担任の先生、クラスメート達とのコミュニケーションに限られているが、ここに大学生が加わることで、英語によるコミュニケーションをより意味合いのあるものにすることができるであろう。フレンドシップ事業での英語活動はさらに、大学に招かれて、自分達のために計画された、大学生主導の英語活動であることから、児童にとっては特別な体験であるに違いない。

活動の概要

2006年1月27日、10時30分～12時に、三重大学メディアホールにて、北立誠小学校の3年生35人を対象に実施した。活動立案、実施者にあたったのは、三重大学教育学部英語教育コース2年生9人である。立案も含めた準備はすべて総合演習（荒尾浩子担当）の中で行われた。

＊ 三重大学教育学部英語教育コース

授業の初日には、フレンドシップ事業を実施と事業の主旨や意義などについて伝えられた。その後、前年度のフレンドシップ事業の様子をビデオに撮ったものを見て、各々が包括的なイメージを持つにいたった。その後の授業内で11月末まで、児童への英語教育の概論や小学校英語教育に関する文献を学習すると同時に、毎回、活動例を一人ずつ発表した。また10月末には鈴鹿市立神戸小学校で英語講師として勤務していらっしゃる鷹巣雅栄先生をお迎えして、小学校における英語活動について講義を受け、現場の様子や実情を知ることができた。その後は、すべてフレンドシップに関する計画や準備に費やされた。

計画を行う中で、活動の一つ一つにどのような意味があり、どのような力をつけることを目的としているかということを常に念頭に置くことが学生達の課題となった。これは、英語活動はしばしば外からは、ただ楽しんでいるだけのお遊びにも見えかねないということと、実際に実施者自身も児童を夢中にさせるために楽しさばかりを重視してしまい目的を見失うことがよく起こるからである。しかしながらこの事業はたった一回の特別な機会でもあり、いくぶんお祭り的な要素を含んでいることは否定できない。そして英語活動の意義の一つである英語を学ぶ楽しさを児童に伝えるという点もはずすことはできない。よって、一つ一つの活動でいかに楽しく明確な目的を達成できるかに注意し、活動案を作成していった。以下に実施した活動を10種類を紹介する。

1．活動

1.1 Song

"How Are You?" という歌を通して自分の気分や健康状態の表現、またそれを人に尋ねる表現を習得する。ジェスチャーを取り入れ、テンポよく歌い表現を習得する。担当の学生が2人前にでて、リードし他の学生は児童の中に入って一緒に歌う。学生のリードに児童がリピートする。

① 8種類の Expressions の説明
② ジェスチャー
③ 歌の練習
④ 本番
⑤ 高速で歌う

言語表現に身体表現を伴わせる TPR (Total Physical Response) に基づく活動である。英語活動の開始時のウォームアップとしては最適で、初め声が小さかった児童も繰り返し行う中で大きな声を出し、活発にジェスチャーを行った。

リードの学生（2人）		児童（全員）
Hello, how are you? × 4	I'm hungry. →	I'm hungry.
	I'm tired. →	I'm tired.
	I'm cold. →	I'm cold.
	I'm sad. →	I'm sad.
Hello, how are you? × 4	I'm happy. →	I'm happy.
	I'm happy →	I'm happy
	I'm good. →	I'm good.
	I'm O.K. →	I'm O.K.

1.2 Self-introduction

学生全員が児童の前に立ち、英語で自己紹介を行った。

学生：My name is _____. Please call me ○○.
児童：○○！

児童により親しみをもって接してもらうこと、人前で、自分のことを大きな声ではっきり伝えることの大切さを伝えることが目的である。

1.3 Reading a Picture Book

エリックカールの "From Head To Toe" をジェスチャーを交えて読み、児童にもその後、その身体の動きを指示しやらせることで、動作に関する表現を学ぶ。

① I'm a penguin and I turn my head. Can you do it? → I can do it!
② I am a giraffe and I bend my neck. Can you do it? →

I can do it!

③ I am a buffalo and I raise my shoulders. Can you do it? → I can do it!

④ I am a monkey and I wave my arms. Can you do it? → I can do it!

⑤ I am a seal and I clap my hands. Can you do it? → I can do it!

⑥ I am a gorilla and I thump my chest. Can you do it? → I can do it!

⑦ I am a cat and I arm my back. Can you do it? → I can do it!

⑧ I am a crocodile and I wriggle my hips. Can you do it? → I can do it!

⑨ I am a camel and I bend my knees. Can you do it? → I can do it!

⑩ I am a donkey and I kick my legs. Can you do it? → I can do it!

⑪ I am an elephant and I stomp my foot. Can you do it? → I can do it!

絵本のページを拡大して印刷し、それを2名が両端を持って掲げて担当学生2名が1ページずつ読み、その内容と同じジェスチャーをする。児童はその間はその場で静かに聞く。よみ終わったページは、一枚ずつホワイトボードに貼る。すべて読み終わったら、ホワイトボードの絵本の絵を指して、英語でその動作を指示し、児童にやらせる。これも1の活動同様、TPRの概念に基づく活動の例である。

1.4 Gesture game

tennis, baseball, cook, comedian, policeman, などいくつかの単語を覚え発音できるようにすることが目的である。初めに、児童に6グループに分け、学生が絵カードを手に、一つずつ単語を発音し、児童にリピートさせる。絵カードは順にホワイトボードに貼っていく。その後、ゲームの説明をする。グループごとに前にでて、相談して一つ単語を選びその単語をジェスチャーで表現させる。他のチームはどの単語か推測し、チームで相談しわかったらその場で手をつないで立ち上がる。早かったチームから回答権を得る。各チーム一回ジェスチャーを行い計六回戦行った。身体の動きを使用するところは前述の活動同様TPRの要素を含むように見えるが、ジェスチャーは回答を導く手がかりとして使用される。回答の際は、身体の動きを伴わず、明確に正しく単語を発音するということが主たる活動となる。6チームにそれぞれ違った色のタスキを渡し、その色によってネーミングを与えた。例えば、青であればsky team、緑であればgreen tea team、黄色はlemon teamといった具合である。このような英語のネーミングを工夫することが、チーム対抗戦への意欲に繋がった。

1.5 Curry Chants

カードゲームにチャンツを取り入れ、児童間でコミュニケーションをさせる活動である。potato, carrot, onion, beef, rice, rouxの絵がついた6種類のカードがある。各チームに一種類ずつカードを配り、チームのメンバーは皆、他のチームのメンバーとコミュニケーションし、カードの受け渡しを行い6種類のカレーの具を皿に集めて一皿を完成させなくてはいけない。集めたカレーの皿数が得点となる。カードを集める際に英語でのコミュニケーションが必要となる。まずは、学生達のオリジナルのチャンツでスタートする。

"Curry rice, Curry rice 1, 2, 3. Let's make curry rice 1, 2,3!"

このチャンツを別チームのメンバーを見つけて、共に言い最後の1.2.3でじゃんけんをする。

勝者："I'm a winner!"

敗者："I'm a loser!" "This is a potato. Here you are."

勝者："Oh, this is a potato. Thank you."

敗者："You're welcome." "See you"

勝者："See you"

このパターンの会話を見つけた相手と行う。カードを集めたいという気持ちがより多くの人とコミュニケーションすることへのモチベーションになっている。制限時間の終了と共に、各チームいくつの皿を完成させたか

をチームごとに立って“five”などと言って英語で発表する。

1.6 Skit and quiz

カナダ、インド、エジプトの3カ国ついての劇を学生が英語で行って見せ、各劇で一問のクイズを出し先ほどと同じチームで回答させた。カナダについてのスキットは実際に数ヶ月前に2人の学生がカナダに行った時の自分達の体験を基に、レストランで食べた奇妙な食べ物、チップのことなどを演じた。レストランで散々、ウエイターからサービスを受けながらチップを置かずにさっさと出ていってしまい、ウエイターが嘆き悲しむ様子を演じた。2つ目はインドを旅する日本人旅行者がお腹がすいて道路を歩く牛を見て牛を食べたいと言って、問題を起こすというものである。3つ目は、エジプトで旅行している日本人が怪しげな魔女に捕まり、象形文字を見せられて、何の意味かわかったら逃がしてやると言われる。捕まった旅行者を演じる学生達が必死に児童達に答を教えて欲しいと助けを求めるという内容である。

Q1. なぜウエイターは泣き崩れたの？
(A. チップがもらえなかった)
Q2. エジプトの牛はどんな存在？
(A. a holly animal)
Q3. 何を表す象形文字？
(A. owl)

1.7 Results

活動4から活動6まではチーム対抗戦であったので、そのスコアーを数え結果発表をした。優勝チームは前に出て、手作りのメダルが渡された。優勝チームへの羨ましさと負けたチームの悔しさは予想外であり、一部不機嫌になる児童がいたが、優勝チームの嬉しそうな様子もまた想像以上であった。

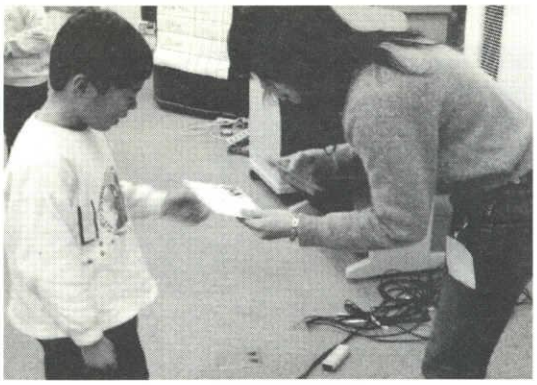
1.8 Good-bye song

カッコウの歌の替え歌でGood-bye songというのをオリジナルで作り学生、児童、全員で手をつないで大きな輪を作って左右に動き回りながら歌った。

Good-bye, good-bye, see you again.（上下に手を振る）
I had a good time.（時計回りで走る）
I had a good time.（逆回りで走る）
Good-bye, good-bye（中央に集まる）
See you again.（元の位置に戻る）

1.9 Congratulations!

学生から児童に手書きのdiplomaを授与した。先ほど、チーム対抗戦でメダルをもらえなかった児童もここで満足し、笑顔となった。



1.10 Special service

学生全員で2人ずつ向かい合って手首をつかんで手で橋をつくりそこに児童を腹ばいで乗せ、次々と人橋の上を送った。かなりの力仕事であったが最期の力を振り絞っての正にサービスであった。

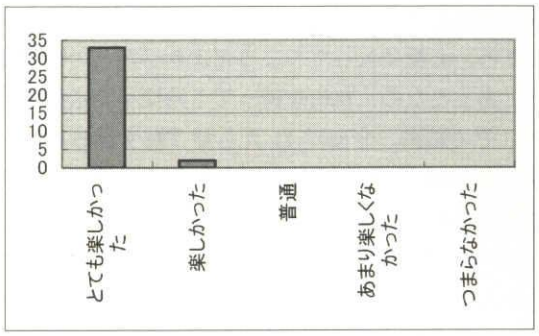
2．児童の反応

2.1 アンケート結果

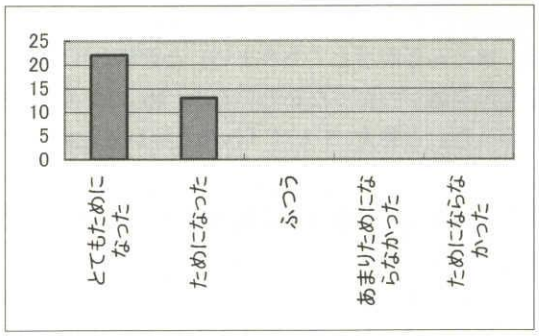
約1時間半に亘る10種類の活動を児童と共に行った。児童へのアンケート結果、感想からどのようなことがうかがえるであろうか。アンケートはあらかじめ印刷し、フレンドシップの英語活動終了後、小学校の先生に持ち帰っていただきその日のうちに対象児童35人に答えてもらった。後日、記入済みアンケートは郵送で送っていただいた。アンケート結果は次のようである。

英語活動について・・・

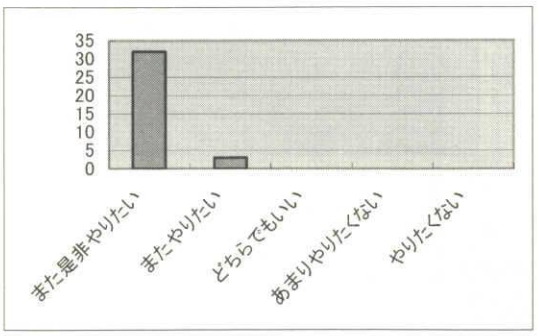
1.



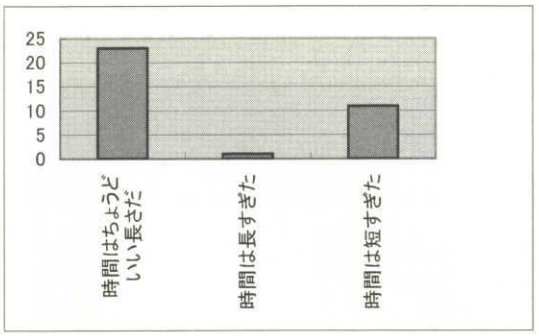
2.



3

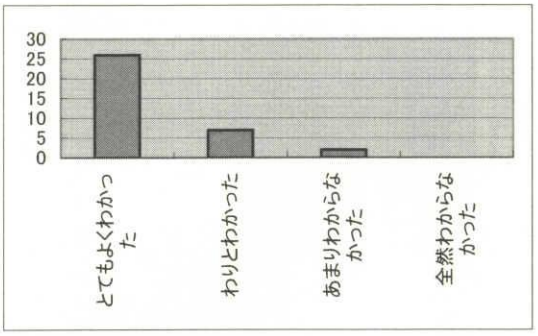


4.

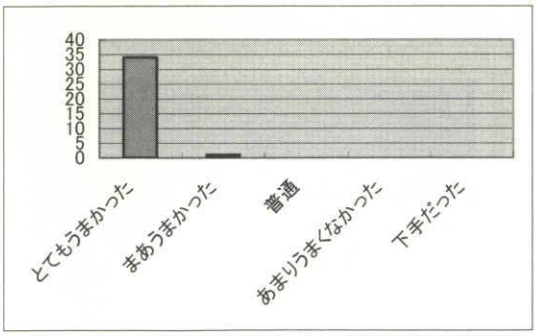


大学生の英語は・・・

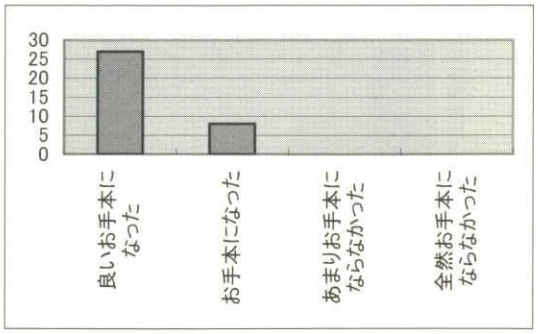
5.



6.

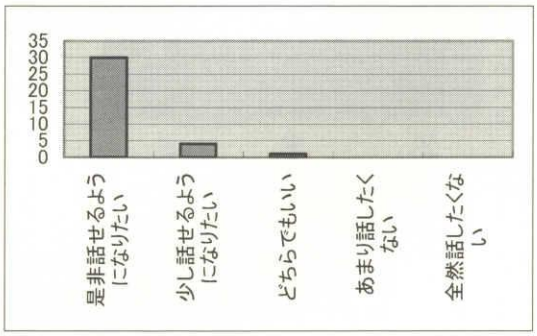


7.

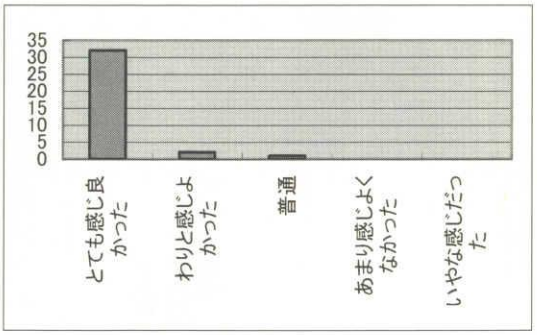


英語は・・・

8.

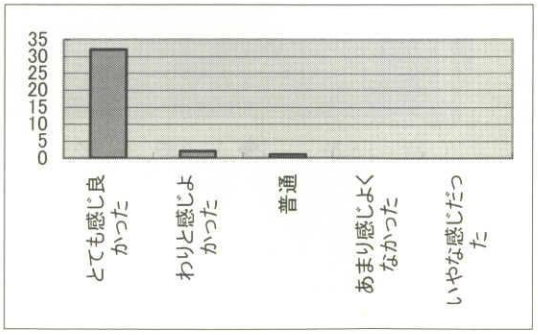


9.

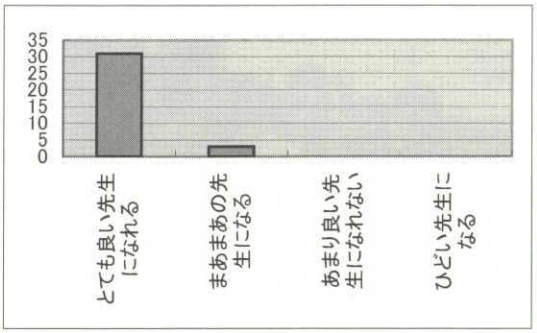


大学生のお兄さんとお姉さんは・・・

10.



11.



2.2 アンケート結果の分析

アンケートの結果から児童は今回の英語活動に大変、肯定的であることがうかがえる。英語活動については、若干の程度の差はあれ、全員が楽しかったという感想であった。児童が楽しい経験ができたということは実施側にとっては大変喜ばしいことである。一方でためになったかということについては、『とてもためになった』が22人で『ためになった』が13人であった。この辺りからとても楽しいイコールとてもためになるという認識ではないことがはっきりする。また是非やりたいという声も大多数で、この事業を持続する励みとなった。時間としては、1時間半は児童にとって長すぎるのではという危惧もあったが、16年度、3年生に1時間半の活動をしたところ、心配に反してちょうどよかったとの声がほとんどであったため、自信を持って1時間半の活動を用意した。その結果、今回は11人もが『短すぎる』という感想となった。4年生ともなると体力、集中力もつき1時間半でも物足りなさが残るのであろう。一方で1名のみ『長すぎる』と答えてはいる。しかし（まだまだやりたかったな・・・）位の感じで終わることができる1時間半がやはり適当な時間の長さではないかと思われる。実施する学生も1時間半でも気を張ってやるためかなり疲労するようである。

児童らの大学生の英語に対する認識はかなり肯定的である。ほとんどが『とてもうまい』と評価している。しかしその英語がわかったかというと、26人は『とてもよくわかった』と答え、7人は『わりとわかった』と答え、1人は『あまりわからなかった』という回答である。学生達の反省会で話し合ったことは、一言一句わからなくても、だいたいわかると感じればいいのではないか、そういったあいまいさに耐えることも英語をずっと学んでいくのに重要ではないであろうかということだ。ゲームの説明など、複雑で、わからないと活動が滞るような部分のみは日本語で明確に指示し、後は英語に徹するのもこのような機会には重要であると思われる。また、学生達は児童の良いお手本にもなっているようで、身近な人

物が実用的に英語を話しているところを見せることが児童に『英語を使用している自分』を明確なビジョンとして持たせる意味において大変意義があると考えられる。

学生達の児童への対応はどうであっただろうか。大多数が彼らの対応を好意的に受け取っており、また先生として児童なりのお墨付きをくれた。楽しい活動に一緒に取り組むことで、お互いの間の隔たりが自然と狭まり親近感を持って、取り組めたことはとても良かったと言える。

2.3 実施学生の反省・感想

反省会にて、実施した英語活動のビデオを見て、お互いに感想を述べ合い、改善点を話し合った。また後日、レポートにまとめて提出させた。彼らの意見として、フレンドシップ実施までの準備はとても大変であったが、やり終えた後はかなりの達成感を味わえて良かったというものが多かった。活動を組み立てる段階では、児童への興味を中心に置き、どんな内容にすれば児童が心から楽しめ集中し、かつ学べるかを重視した。一つ一つの活動について色々な反省点が出された。以下はその一部である。

活動に関して・・・

＊ 絵本を読んでジェスチャーをさせる活動で、児童の理解のためにと、あえて注意してゆっくりとした速度で読んだのであるが、小学校の先生からは後で、もっとテンポよく読んでもよかったのでは・・・とのご意見をいただき、普段、児童を相手に授業をしていないと、何が最適なのかというカンが働かない。

＊ カードを用いたゲームは児童たちがなぜかカードを交換するタイプの活動に熱中しやすいという傾向に着目し、狙い通り、とても夢中で取り組んでおりよかった。一方で、交換する時に用いる英語表現がしっかり定着していないこともあり、交換する際、きちんと英語が使えていない子供が何人かいた。活動前の導入をもっと丁寧にやっても良かったのではないだろうか。

＊ 劇で歓声がたくさん聞こえてやっていてとても楽しかった。チップの意味など、子供にきちんと伝わるように説明するのは難しかったが、ちゃんと答えることができたので安心した。クイズでの回答時間、得点配分など、しっかり決めていなかったので、あたふたしてしまった。前もって念入り細部まで決めておくべきであった。

＊ 活動と活動の間が長くなってしまい、テンポが悪くなってしまった。子供の集中力が散漫にならないようテンポに気をつけなくてはいけない。

＊ 使用する英語の難易度に気を使った。また日本語で説明する時も、やはりわかりやすさのための工夫が必要だった。現場の先生もこうやって説明のわかりやすさに苦労しているのかなと思った。

＊ どれだけ今回の活動で子供にとって英語の勉強になったかわからない。実際に英語を勉強として教えるのは、また違うのであろう。

児童に関して・・・

＊ こちらが気後れする位、子供たちは明るく元気であった。子供から元気をもらった。子供たちはとても純粋でかわいかった。

＊ チーム対抗のゲームで競わせたのは児童を活気付け盛り上げる助けになったが、速いグループから回答をするというゲームでは、どこが一番早かったかの見極めが難しい時もあり子供たちの間で『私たちのほうが早かったのに・・・』などの不満の声が聞こえた。また優勝チームに手作りのメダルを渡し、もらえた児童は大喜びであったが、負けたチームはがっかりした様子でかわいそうだった。全員に最後修了書のプレゼントを用意しておいて良かった。児童の反応の仕方には想定外のものが多いので、細かな配慮が大切であると実感した。

今後に関して・・・

＊ 機会があればまたやりたい。小学校の現場教員になったら、今回の活動を使いたい。

＊ 色々なところから活動のアイディアを得ることができた。将来の授業実践では自分だけで考えるのでなく、うまくアイディアを得ることが大切だと思った。

2.4 終わりに

以上のように平成17年度の英語教育コースの学生によるフレンドシップ事業は無事に終了した。活動の計画、準備の中で対象となる児童を常に念頭におき、取り組むことができたことが、今回の成功につながった。時には、こちらが目論んでいたことが必ず肯定的な方向に進まなかったり、思わぬ反応があったりと、児童と生身で接することは常に予想外の事に直面するものだ。しかし、このことこそが、学生にとっての大きな収穫であると思わ

れる。また教える立場になって初めて現場の先生の苦労に思いをはせることができたことも貴重な経験である。わずか1時間半の活動をするのに、どれだけの労力と時間をかけたかを考えれば、身にしみてわかったはずだ。この体験を基にさらに教育への熱意があがることを期待したい。

また児童にとっては、英語に関して忘れられないようなポジティブな経験となればと願う。学生の声にもあったが、たった一回の活動でどれだけ勉強に直結したかはわからない。しかし（楽しかった）（興味深かった）という心的経験は、今後の英語学習への興味や態度を促進する貴重な財産の一つとして児童の中に残るのではなかろうか。

今後も学生、児童の双方が学び合い、利を得ることができるようなフレンドシップ事業が実施していきたいと考える。課題としては、計画に時間かけ過ぎずに、リハーサルや練習にもっと時間をかけていくこと、またせっかく作り上げた活動をもう少し広く活かすことができる方法を考えていきたい。

参考文献

Carle, E（1997）*From Head to Toe.* New York: Puffin Books.

元気イングリッシュ“How are you?”
http://genkienglish.net/howRUj.htm